

# オセアニア[NZ]



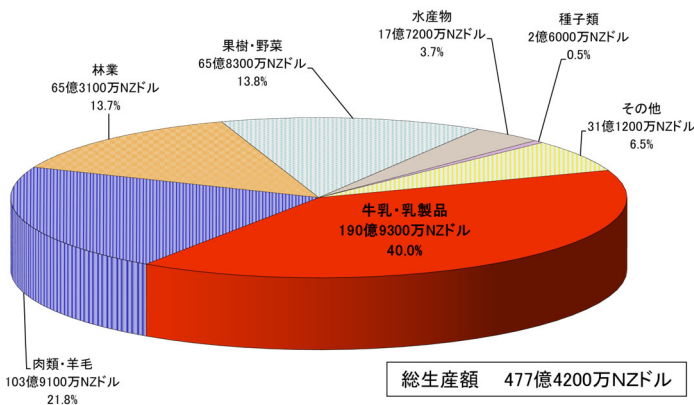
## 1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、国土面積（2680万ヘクタール）の4割強に当たる1126万ヘクタールが農地となる農業立国である。また、人口は約513万人（2022年）と、農業生産に対して国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存する割合が高くなっている。総輸出額に占める農畜産物の輸出額（FOB）の割合は約5割となり、外貨獲得上、重要な地位にある。

このうち、畜産部門は、農林水産業粗生産額の約6割、農畜産物輸出額の約7割を占め、特に牛乳・乳製品は、双方ともに4割以上を占めるなど基幹部門となっている。

2020/21年度（7月～翌6月）の農林水産業粗生産額は、477億4200万NZドル（前年度比0.7%減）となった（図1）。

図1 農林水産業粗生産額（2020/21年度）



資料：NZ一次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」  
注：年度は7月～翌6月。

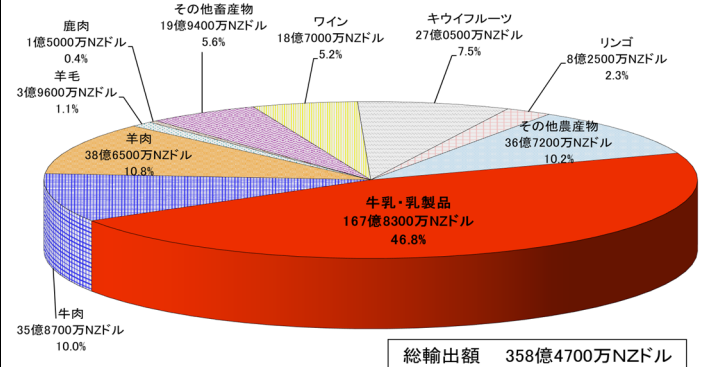
このうち、牛乳・乳製品はCOVID-19の拡大により世界経済が減退し、輸出価格が下落基調で推移したことで190億9300万NZドル（同5.2%減）と前年度からやや減少した。また、肉類・羊毛については、牛肉や羊肉の外出需要が減少した一方で、中国でのアフリカ豚熱の発生や豪州の牛群再構築に伴う牛肉供給量の減少から、NZ産の需要が高まったことで103億

9100万NZドル（同2.7%減）とわずかな減少に留まった。

一方、果樹・野菜は、キウイフルーツを中心とした果樹の生産が好調となったことで、65億8300万NZドル（同0.4%増）とわずかに増加した。

また、20/21年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、358億4700万NZドル（同2.9%減）とわずかに減少した（図2）。

図2 農畜産物輸出額（2020/21年度）



資料：Beef + Lamb NZ「Farm Facts」  
注1：年度は7月～翌6月。  
注2：林業および水産業を除く。

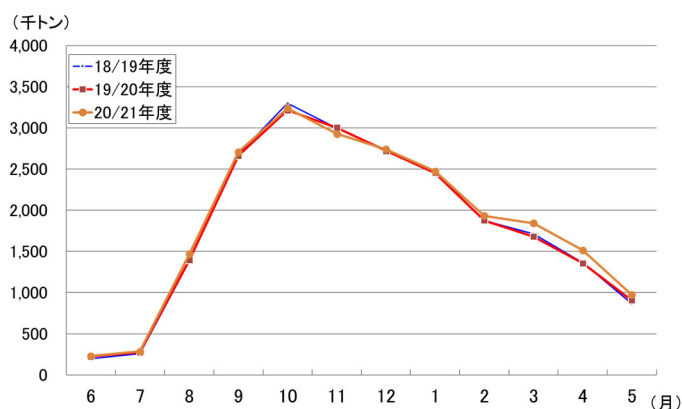
品目別に見ると、牛乳・乳製品は、輸出価格が下落基調で推移したほか、脱脂粉乳やバターの出荷量が前年度を下回ったことから、輸出額は167億8300万NZドル（同4.7%減）とやや減少した。また、牛肉は輸出価格の下落から35億8700万NZドル（同5.9%減）とやや減少した。さらに、羊肉（ラム・マトン）は38億6500万NZドル（同2.7%減）、羊毛は、3億9600万NZドル（同8.3%減）とそれぞれ減少した。

## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月に搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産のピークを迎え、翌年6～7月にはほとんどの搾乳牛が乾乳し分挽に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている（図3）。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の半年間で、年間生産量の約4分の3を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand  
注：年度は6月～翌5月。

NZの生乳生産コストは、放牧中心の飼養形態から世界的に見ても最も低い水準にあり、生産量の9割以上が輸出に仕向けられる。

NZの生乳生産量は全世界のわずか約2%にしか過ぎないが、世界最大の乳製品輸出国であり、特に全粉乳の国際市場でのシェアは約6割を占めている。しかし、国内市場の規模が小さいため、生産者乳価や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい特徴を有している。

### ① 主要な政策

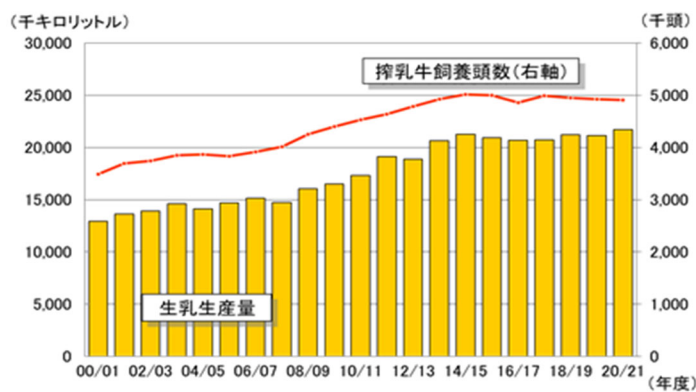
酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。2001年9月まで、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が乳製品の一元輸出機能を有していたが、酪農産業の再編が行われ、同年10月、キウイとNZデイリー・グループの2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業も兼ねる)であるフォンテラが誕生した。

フォンテラの誕生に合わせて、01年に生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法では、フォンテラの独占による弊害を回避するため、乳業の新規参入機会の付与などが盛り込まれたほか、集乳の義務や他社の求めに応じた一定量の生乳供給が義務付けられていた。しかし、この20年間でNZにおけるフォンテラの市場シェアが約8割程度にまで低下していることを背景に、20年7月、一定条件のもとで集乳の義務を免除するなどの法改正が行われ、23年6月から施行されることとなっている。

### ② 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。最近の状況を見ると、2015/16年度から乳製品国際価格の低迷に伴い淘汰が進んだことで、搾乳牛飼養頭数は2年連続で減少した(図4)。17/18年度には乳製品輸出価格が回復したことで増加に転じたものの、18/19年度に再び減少に転じて以降、20/21年度まで3年連続で減少している。

図4 生乳生産量と搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：年度は6月～翌5月。

注2：搾乳牛飼養頭数は12月末時点。

また、NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年では、人口が少なく草地面積が確保できる南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されたことから、南島で頭数が拡大している。20年（12月時点）の搾乳牛飼養頭数は北島での減少に押され、全体で490万4000頭（前年度比0.4%減）とわずかに減少した（表1）。従来からの主産地である北島は283万9000頭（同0.6%減）、新興の酪農生産地である南島は206万5000頭（同0.0%増）となった。

表1 地域別の搾乳牛飼養戸数・頭数・規模の推移と1頭当たりの生乳生産量

地域・区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21	
北島	飼養頭数(千頭)	2,896	2,952	2,891	2,857	2,839
	飼養戸数(戸)	8,529	8,377	8,156	7,979	7,845
	1戸当たり飼養頭数(頭)	340	352	354	358	362
南島	飼養頭数(千頭)	1,965	2,041	2,056	2,064	2,065
	飼養戸数(戸)	3,219	3,213	3,216	3,200	3,189
	1戸当たり飼養頭数(頭)	611	635	639	645	647
合計	飼養頭数(千頭)	4,861	4,993	4,946	4,922	4,904
	飼養戸数(戸)	11,748	11,590	11,372	11,179	11,034
	1戸当たり飼養頭数(頭)	414	431	435	440	444
1頭当たりの生乳生産量(リットル)	4,259	4,151	4,290	4,296	4,426	

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：各年12月末時点。

注2：搾乳牛の頭数および戸数。

生乳生産量は、搾乳牛頭数の増加に加えて補助飼料の給与が増加傾向にあることで、1頭当たり乳量の増加などから右肩上がりで推移してきた(図4)。しかし、乳製品輸出価格の低迷を受け、生産者乳価が引き下げられたことで生産者の生産意欲が減退し、搾乳牛頭数

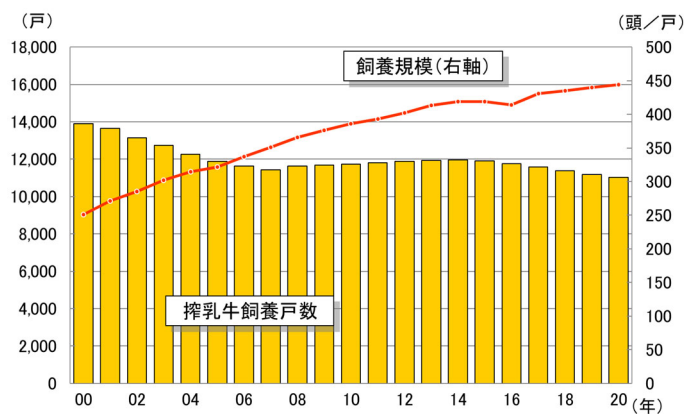
が減少したことから、15/16年度から2年連続で前年度を下回った。

18/19年度は春先の気候に恵まれ牧草地の生育が良好であったことから生乳生産量は増加した。近年は、搾乳牛飼養頭数が減少傾向にあるものの、20/21年度には、1頭当たりの生乳生産量が4426リットル(同3.0%増)と過去最高を記録したことで、前年を上回った。

飼養戸数は、07年に乳製品国際価格が高騰して以降、14年(1万1970戸)にかけて7年連続で前年を上回ってきたが、15年以降、乳価の低迷などを反映し減少傾向に転じ、20年は1万1034戸(同1.3%減)と6年連続で減少した(図5)。

1戸当たり搾乳牛飼養頭数は、酪農家の規模拡大に伴いこれまで一貫して増加してきた。16年は、このような長期的な傾向に反して減少したものの、17年は431頭(同4.1%増)、18年は435頭(同0.9%増)、19年は440頭(同1.1%増)、20年は444頭(同0.9%増)と4年連続で前年を上回り、引き続き増頭傾向を示している。

図5 搾乳牛飼養戸数と1戸当たり搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注：各年12月末時点。



写真 乳用牛の放牧風景(北島:タラナキ地方)

### ③ 牛乳・乳製品の需給動向

NZの乳製品輸出先は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国をはじめ、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界140の国や地域に及んでいる。同社は2002年に、NZ国内で世界的大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立し、03年1月から、主に中南米市場での乳製品製造・販売を手掛けている。

20/21年度(7月～翌6月)の主な乳製品の輸出量のうち、全粉乳は、主要輸出先である中国からの引き合いが堅調であったことから、全体では165万1000トン(前年度比10.1%増)とかなりの程度増加した(表2)。一方、バターについては、41万8000トン(同4.6%減)とやや減少した。また、脱脂粉乳は、東南アジアからの引き合いが弱まったことから、33万トン(同12.0%減)とかなり大きく減少した。チーズについては、36万1000トン(同11.4%増)とかなり大きく増加した。

表2 搾乳牛飼養頭数、生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位:千頭、千キロリットル、千トン)

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21	
搾乳牛飼養頭数	4,861	4,993	4,946	4,922	4,904	
生乳生産量	20,702	20,724	21,217	21,145	21,705	
輸出量	全粉乳	1,354	1,366	1,506	1,499	1,651
	バター	476	452	466	438	418
	脱脂粉乳	415	394	374	375	330
	チーズ	352	330	333	324	361

資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1: 経産牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。

注2: 生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。

注3: 乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

### ④ 生産者乳価と生産コストの動向

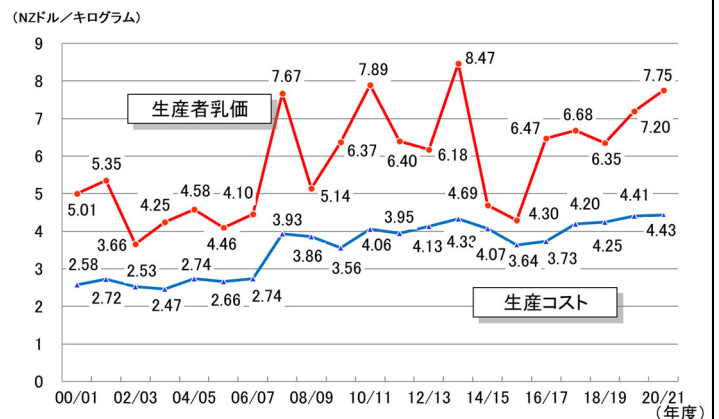
同国の生産者乳価は、乳製品の高い輸出依存度を背景に、国際的な価格動向や為替相場の動向などに左右される傾向にある。

2020/21年度(6月～翌5月)の生産者乳価(平均支払乳価)は、生乳の固形分<sup>(注)</sup>1キログラム当たり7.75NZドル(前年度比7.6%増)と上昇し、過去10年の平均乳価(同6.46NZドル)との乖離は前年度の0.82NZドルから1.29NZドルに広がった(図6)。

生産コストは、2000年代後半に入り乳価の上昇を受け、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農でも濃厚飼料の給与が増加したことから、微増傾向で推移してきた。しかし、14/15年度および15/16年度は、乳価の低迷により、生産者が補助飼料の給与やかんがい施設への投資などを抑制したことから低下した。20/21年度は、乳価の上昇を受け、生産者の生乳増産意欲が高まり、補助飼料の給与を行ったことなどから、生乳の固形分1キログラム当たり4.43NZドル(同0.5%増)と5年連続で増加した。

(注) 乳脂肪分および乳たんぱく質。

図6 生産者乳価と生産コストの推移



資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、 「Economic Survey」

注1: 年度は6月～翌5月。

注2: 生乳の固形分ベース。

### (2) 肉牛・牛肉産業

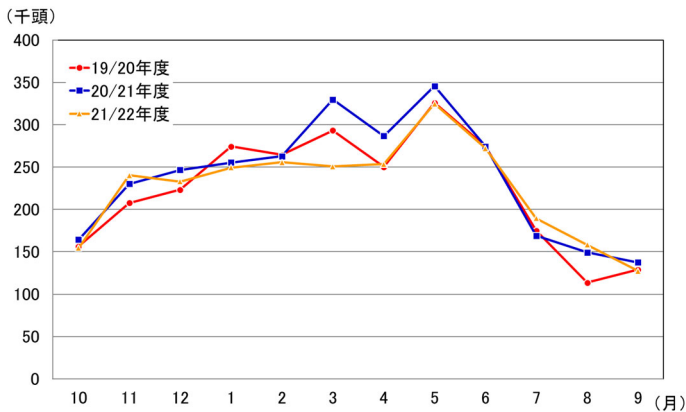
NZの肉用牛生産は、酪農と同じく放牧(草地)に依存した生産体系となっており、フィードロットなど穀物肥育による生産は、ごくわずかである。また、酪農部門



からの牛の供給が多いことで、牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることが、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、肉用牛のと畜頭数は牧草の生育が良好な春（9～11月）から夏（12月～翌2月）にかけて増加し、冬（6～8月）に減少する（図7）。一方、と畜頭数全体の4割程度を占める経産牛は、大部分が乳用経産牛であり、草地の牧養力が落ち、乾草などが必要になる冬季に向けて酪農部門から出荷され、飼料の節約を行う必要がある秋季の5月にピークを迎える。

図7 成牛と畜頭数の推移



資料：Statistics NZ  
注：年度は10月～翌9月。

また、肉用牛として飼養される牛の約2割は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）である。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛は加工用牛肉（挽き材用）として、主に米国を中心に輸出されている。また雄子牛は、一部は肥育に回されるものの、多くが生後4日程度でと畜され、主にベビーフードやペットフード向けに仕向けられる。

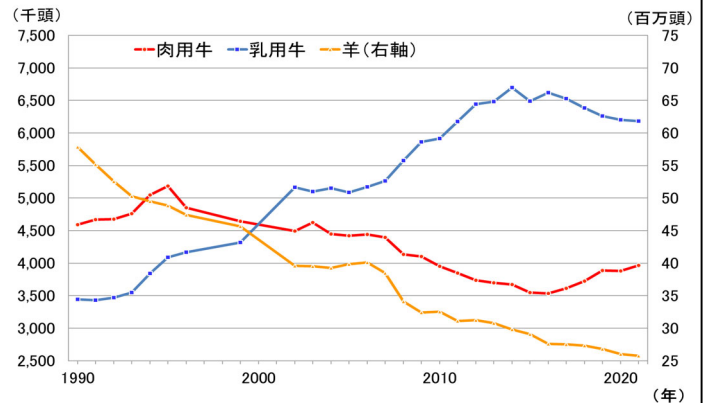
NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉の8割程度（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受ける傾向にある。

### ① 肉用牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の

悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業など、より収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりに増加している乳用牛と逆転した（図8）。その後、14年をピークに乳用牛の飼養頭数は減少傾向となったが、16年以降、牛肉の価格が好調であったことから肉用牛の飼養頭数は増加傾向に転じている。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



資料：Statistics NZ  
注：各年6月末現在。

肉用牛飼養頭数は、長期的には減少傾向にあるが、21年6月末時点では、中国でのアフリカ豚熱の発生や豪州での牛群再構築に伴う牛肉供給量の減少などから、NZ産の需要が高まったことで396万5000頭（前年比2.1%増）と前年度をわずかに上回った（表3）。

表3 肉用牛飼養頭数の推移

区分/年	2017	18	19	20	21
肉用牛	3,616	3,721	3,890	3,883	3,965
うち繁殖雌牛	976	1,029	1,105	1,067	1,067

資料：Statistics NZ  
注：各年6月末時点。

## ② 牛肉の需給動向

### ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少傾向が続いていた。

16/17年度は、前年の干ばつによる経営環境が改善し、乳用牛の保留が進んだことなどから、成牛と

畜頭数は239万3000頭(前年度比7.4%減)、牛肉生産量は60万5000トン(同4.4%減)と減少した(表4)。

17/18年度は、比較的高水準な肉牛取引価格と、17年後半に発生した干ばつにより牧草の生育が悪化したことから、淘汰が増加したものとみられ、成牛と畜頭数は259万2000頭(同8.3%増)、牛肉生産量は65万1000トン(同7.6%増)とかなりの程度増加した。その後も、と畜頭数や牛肉生産量は増加基調を維持し、20/21年度は輸出需要が堅調に推移したことから、成牛のと畜頭数は285万2000頭(同6.1%増)、牛肉生産量もこれに伴い72万9000トン(同6.9%増)と前年度を上回り、17/18年度から4年連続で増加した。

#### イ 輸出動向

近年の牛肉生産量の増加基調に合わせる形で、NZ産牛肉の輸出も堅調にあり、2020/21年度の牛肉輸出量は、50万2000トン(同7.9%増)と増加した(表4)。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である中国向けは20万4289トン(同14.2%増)とかなり大きく増加した。第2位の輸出先である米国向けは16万5332トン(同4.4%増)とやや増加した。日本向けについては、2万8984トン(同29.8%増)と大幅に増加した。

表4 牛肉需給の推移

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
成牛と畜頭数(千頭)	2,393	2,592	2,631	2,688	2,852
子牛と畜頭数(千頭)	1,764	1,829	1,816	1,903	1,887
牛肉生産量(千トン)	605	651	667	682	729
子牛肉生産量(千トン)	28	30	29	30	30
牛肉輸出量(千トン)	396	431	453	465	502

資料：Statistics NZ、Beef + Lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

### ③ 輸出用肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉の8割程度(枝肉重量ベース)が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況のほか、為替相場にも左右される

傾向がある。

輸出用肉用牛の生産者手取価格は、中国などアジアからの牛肉需要が顕著であることから、2010/11年度以降、比較的高い水準を維持しているが、17/18年度以降、下落傾向を示し、20/21年度は、1頭当たり1206NZドル(前年度比1.3%減)とわずかに減少した(表5)。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

(単位：NZドル/頭)

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
生産者手取価格	1,252	1,244	1,223	1,222	1,206

資料：BLNZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：皮革を含む。